

暑を山園に避く

王世貞

残杯移し傍う水辺の亭

暑気人を衝ぎ忽ち自ら醒

最喜樹頭風定まるの後

半池零雨半池星

【作者】王世貞(一五二六〜一五九〇年)中国、明(みん)中期の文人。字(あざな)は元美。号(あざな)は鳳洲(ほうしゅう)または州(えんしゅう)山人。

太倉(たいそう)(江蘇(こうそ)省)の人。一五四七年の進士。官(あて)は南京(なんきん)刑部(けいぶ)尚書(しょうしょ)に至(いた)った。李攀竜(りはんりゅう)とともに

後七子(ごしち)の領袖(りゅうしゅう)として、何景明(かけいめい)、李夢陽(りぼうよう)ら前七子(ぜんしち)の復古運動(ふこうどんどう)を継承(けいせい)し、

万曆年間(まんりき)一五七三〜一六二〇の前半、詩壇(しだん)に君臨(きんりん)した。「文(ぶん)は前漢(ぜんかん)、詩(し)は盛唐(せいとう)」と主張(しやうちやう)し、中唐(ちゆうとう)以後(いご)の書物(しよぶつ)は読む(よむ)なと禁(かぎ)じたほど

であったが、晩年(ばんねん)には白居易(はくきよ)を愛(あい)し、格調(かくてう)を重んじて裝飾(しやうじ)的(てき)であったその詩文(しぶん)は、しだいに平淡(へいたん)に赴(おもむ)いた。

門人(もんじん)は天下(てんか)に満ち、復古派(ふこくぱい)の勢威(せいゐ)は絶頂(てつてい)に達(いた)ったが、彼ら(かれら)の詩文(しぶん)の模擬(もぎ)はやがて剽窃(てうせつ)ひようせつへと墮落(だらく)し、衰退(すい退)の兆候(しやうこう)を帯(た)び始める。

彼は(かれ)きわめて博學(はくがく)で、その領域(りやうい)も文芸(ぶんげい)のみならず經學(けいがく)や史學(しがく)にわたり、著(あ)した『州山人四部稿(しゅうざんじんしよぶこう)』、『同(どう)統稿(とうこう)』、『芸苑卮言(げんえんしげん)』

など三十種(さんじゆ)に及(およ)ぶ。

【語釈】*残杯(ざんぱい)：残(のこ)った酒(さけ)。 *樹頭(じゆとう)：梢(しやう)。 *半池(はんち)：池(い)の半分(はんぶん)。 *零雨(れいう)：パラパラと降(ふ)る残(のこ)り雨(あめ)。

【通釈】飲(の)み残(のこ)した酒(さけ)を持(も)ち、涼(すず)を求(もと)めて水邊(みづべ)の部屋(へや)に席(せき)を移(うつ)したが、ムツとするような暑氣(じゆき)に襲(おそ)われ、折角(せきかく)の酔(よ)いも忽(たち)ち醒(さ)めてしまった。

そんな中(なか)にあつて一番(いちばん)嬉(うれ)しいのは、突然(とつぜん)の夕立(ゆふだち)が去(い)って梢(しやう)に吹(ふ)く風(かぜ)も治(な)まった後に、池(い)の半分(はんぶん)にパラパラと残(のこ)り雨(あめ)が降(ふ)り注(つ)ぎ、あとの半分(はんぶん)には星影(ほしかげ)が映(うつ)っている一瞬(いつしゆん)の景(けい)だ。